

本校学生の肥満度について

横山 学*

The percentage of overweight Students at Takuma National College of Technology

Manabu YOKOYAMA

Synopsis

This paper deals with the percentage of overweight students in 2007 at Takuma National College of Technology. The survey shows where Takuma National College of Technology is ranked between all prefectures in Japan and Kagawa one.

1. はじめに

最近、街中を歩いていて、肥満傾向の人々(とりわけ、子供・若者)を見かけることが以前に比べて増えているように感じる。《世界長寿国》と呼ばれて久しいが、《長寿》という言葉聞いて連想するイメージはまず《健康》なのだが、肥満状態は《健康》からかけ離れているように思われる。そもそも、我が国における平均寿命は1950年代、主要先進国においては最低の水準にあった。¹⁾しかし、1970年代～80年代には世界一となり、現在も高水準(男:アイスランド、香港に次ぐ世界第3位、女:23年連続世界第1位)を維持している。その要因として、医療の発達・保険制度の普及による乳児および高齢者の死亡率を大幅に改善できたこと。そして、日本人の伝統的食生活が考えられる。

近年、日本人の死亡要因はがん・心臓病・脳卒中が全体の約60%を占めている。²⁾これらの病気は、多くの場合が食事や運動といった日常の生活習慣と深く関連しており、日本人が健康でより長く充実した人生を送る上で《生活習慣》が今後の大きな課題といえる。《肥満》はまさに個人の《生活習慣》が最も視覚的に現れた状態であり、本校において1度調べてみる必要があると思われる。そこで、本校の学生がどのような状態にあり、香川県、ある

いは全国レベルでどのような位置づけにあるかを調査した。

2. 資料および調査項目

2007年度本校学生15～17歳の健康診断記録および2007年度学校保健統計(15～17歳)³⁾を使用した。適正体重を調べる方法の1つである標準体重法を用いて肥満度(%)を年齢・性別ごとに求めた。そして、肥満傾向児の全体における割合を調査した。

3. 肥満度の算出方法

$$(\text{性別} \cdot \text{年齢の係数 } a) \times (\text{身長})_{\text{cm}} - (\text{性別} \cdot \text{年齢の係数 } b) = (\text{身長別標準体重})_{\text{kg}}$$

$$[(\text{体重})_{\text{kg}} - (\text{身長別標準体重})_{\text{kg}}] / (\text{身長別標準体重})_{\text{kg}} \times 100 = (\text{肥満度})_{\%}$$

4. 肥満傾向児の定義

肥満傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が20%以上の者である。

5. 本校の現状

表1に性別・年齢別における肥満傾向児出現率の地域別比較を示し、図1から図3にはそれらを男子・女子・男女合計ごとにグラフ化した上で、本校

* 一般教科

表1 性別・年齢別における
肥満傾向児出現率の地域別比較

		15歳	16歳	17歳
男子	全国	13.47	12.92	12.87
	香川	18.36	11.51	16.18
	本校	15.91	20.14	13.64
	n	132	139	132
女子	全国	9.87	9.18	9.23
	香川	13.24	12.60	11.55
	本校	8.00	14.29	17.24
	n	25	21	29
合計	全国	11.70	11.07	11.08
	香川	15.85	12.05	13.82
	本校	14.65	19.38	14.29
	n	157	160	161

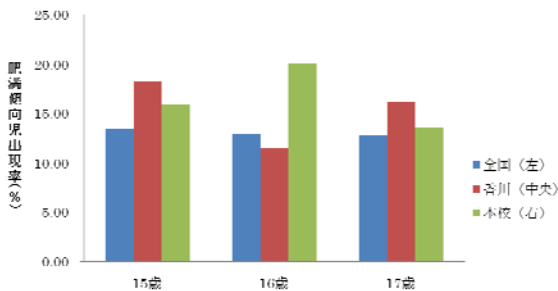


図1 男子

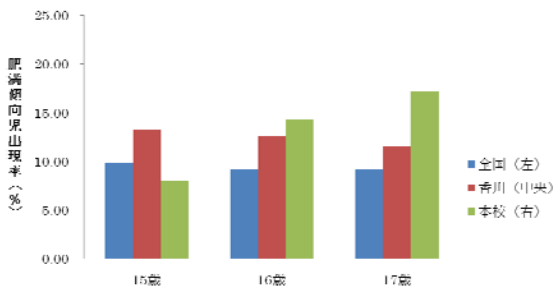


図2 女子

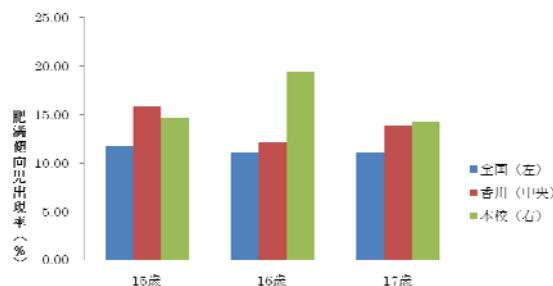


図3 男女合計

における肥満傾向児出現率の現状、および地域における位置づけを比較考察した。

男子における肥満傾向児出現率の傾向として、全国は加齢にしたがって緩やかな減少から停滞にあると言える。香川県は各年齢で基本的に最も高い出現率であるものの、16歳時に全国を下回るほどの大幅な減少が見られ、17歳時で再び増加するといった全体的には緩やかな減少傾向にあると言える。本校において、基本的には香川県より少ないが、全国よりは高い水準にあるようだ。そして、香川県とは反対に、16歳時では増加(15歳時の約1.27倍、16歳時の香川県に対して約1.75倍)、17歳時では大幅に減少(16歳時の約0.68倍)している。香川県同様、全体的には緩やかな減少傾向にあると言えるだろう。

女子における肥満傾向児出現率の傾向として、全国は17歳時でわずかながら16歳時を上回るものの、男子同様、加齢にしたがって緩やかな減少から停滞にあると言える。香川県は、各年齢において全国を上回るものの、緩やかな減少傾向を示している。本校は15歳時において最低出現率(最高水準である香川県の0.6倍)であったが、全国および香川とは対照的に加齢にしたがって上昇傾向にある。16歳時には最高水準の香川を上回り、17歳時では全国の約1.87倍、15歳時の本校に対して約2.16倍と突出している。

男女合計における肥満傾向児出現率の傾向として、全国は16歳時および17歳時の差が100分の1とほぼ変わらないことから、男子および女子同様、加齢にしたがって緩やかな減少から停滞にあると言える。香川県における17歳時は16歳時より増加(16歳時の約1.15倍)しているものの、基本的には減少傾向にあると言える。本校は16歳時において、全国の1.75倍、15歳時の本校に対して約1.32倍と突出しているものの、全国よりさらに緩やかな減少傾向にあると言える。

6. まとめ

これらのことをまとめると、以下の通りである。

- (1)男子において、本校の出現率は16歳時に突出するが、基本的には加齢にしたがって減少傾向にある。また、全国よりは高いものの、香川県よりは低い水準にある。
- (2)女子において、全国および香川県の出現率は加齢にしたがって減少傾向にあるが、本校は反対に上昇傾向にある。また、15歳時は全国および香川県

と比較して最も低いにもかかわらず、16 歳時以降は最も高い水準にある。

- (3) 男女合計において、本校は極めて緩やかな減少傾向にあり、16 歳時以降からは全国および香川県より高い水準にある。

7. 終わりに

肥満というのは、基本的に栄養の摂取バランスの崩れから起こることが多い。つまり、消費エネルギーと摂取カロリーとのバランスである。また、睡眠時間の不足も関連性があるといわれている。

今回、本校の学生がどのような水準にあるのか、また香川県および全国においてどのような位置づけにあるかを知るために調査を行なったが、男女合計における各年齢で、香川県が全国の中で平均より高い水準にあること。そして、本校はその香川県の中で平均的水準、もしくはそれ以上にあるということ。また、女子が加齢に伴って上昇していくこと。とりわけ、男女ともに 16 歳で香川県の平均的水準を上回っていることから、《2 年生》が今後の注目に値するものと思われる。

肥満に影響を及ぼすファクターは様々で、このような結果になった原因について現段階では断定できない。今回のデータはあくまで 2007 年度の 15～17 歳を対象としたもののみであるため、今後は縦断的かつ横断的分析を行なうとともに、日頃の食事内容、食事習慣、運動の頻度(課外活動参加の有無)、そして睡眠の側面から分析していくことで、本校の状況および原因がより正確に把握できるであろう。それらは今後の研究課題と言える。

参考文献

- 1) 厚生労働省 「完全生命表」、「簡易生命表」
- 2) 厚生労働省 「人口動態統計」 2006
- 3) 文部科学省 「学校保健統計」 2007